福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

発行
(財) 第五福竜丸平和協会
〒136-0081 東京都江東区
夢の島 3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

八月九日の「日の丸」

吉田一人

あれは長崎原爆四十周年の日だったのだから、一九八五年八月九日のことである。この日の朝行なわれる平和授業を参観するために、爆心地にほど近い城山小学校に行った。

授業の前に祈念式があるというので講堂に入った時、ギョッとした。真正面、舞台の上に「日の丸」、である。

原爆の日の平和祈念式に、どうして「日の丸」が……。それが、文部省の強い〝指導〟によるものであることは分かっている。だが、それにしても、なぜここに「日の丸」なのか。

原爆被害は「遡れば戦争という国の行為によってもたらされたもの」(孫振斗訴訟最高裁判決)である。その戦争は「日の丸」を押し立てて進められた。「日の丸」は原爆被害をもたらした元凶の旗印ではないか―。祈念式の間中、恐怖に似た違和感にとらわれつづけていた。

それから十四年後の八月九日という日に「日の丸・君が代」法が成立させられるとは、考えも及ばないことであった。どうして、八月九日に―。なにか意図的なにおいさえも感じてしまうのである。

一九九九年五月二十四日、ガイドライン関連法成立。この日、日本は新たな「戦前」に入った、と私は思っている。「戦争する」法律だからである。

後を追って、改憲をめざして国会に憲法調査会を設置する法、「日の丸・君が代」法、盗聴法などが続々と、靴(軍靴?)音高く登場した。「戦前」を形づくる法律たちである。

今年の八月六日、九日はこうした靴音の中でやってきた。

秋葉忠利広島市長の平和宣言は、核兵器廃絶のたたかいの先頭を切った被爆者への感謝の言葉に満ちていた。秋葉市長は、被爆者の「大きな足跡」として三つをあげている。「原爆のもたらした地獄の惨禍や絶望を乗り越えて、人間であり続けた事実」「核兵器の使用を阻止したこと」「原爆死没者慰霊碑に刻まれ、日本国憲法に凝縮された〝新しい〟世界の考え方を提示し実行してきたこと」である。そして「核兵器を廃絶する強い意思を持つこと」をよびかけている。

伊藤一長長崎市長は平和宣言で「核兵器廃絶宣言を今世紀中に」と訴えた。

両市長はともに「ハーグ世界市民平和会議」の成果をたたえて、「この考え方こそ二十一世紀、人類が進むべき道」(広島)、「こうして力が結集するとき、核兵器廃絶は必ず可能です」(長崎)と宣言している。

ハーグ平和会議が採択した「公正な国際秩序のための基本十原則」は「核兵器廃絶」(第六項)とともに、その第一項で、日本国憲法第九条の平和の理念、不戦の誓いに各国が見習うよう呼びかけている。

「戦前」は、戦争にならなければ仮称に終わる。現在の「戦前」をほんとの「戦前」にしないためのただ一つの道は、「戦争しない」「外国の戦争への加担もしない」ことである。

核兵器も戦争もない二十一世紀に似合う旗印は「日の丸」ではなく、憲法九条、歌は「君が代」ではなく、「原爆許すまじ」ではないのかな。

(ジャーナリスト)

第五福竜丸エンジン十二月末公開へ

第五福竜丸エンジンの展示のための工事着工がやっときまりました。十月から工事を始め、今年十二月末までに完成の予定で、いま設計作業等が進められています。

第五福竜丸展示館の北側(海側)の広場に新たに一階建て、鉄骨造、32㎡のエンジン展示のための建屋を設置し、コンクリートの平台に四本の柱と屋根、南北に大きなひさしを付け雨をしのぎ、周囲に管理柵をつける、というシンプルな構造で、展示館の雄大な黒い曲面の中央に対面し、小さくても象徴的な建物になる予定です。

北海道留辺蘂町から「少年少女国内研修」

エンジンは、文化財の修復などを専門とする「京都科学」の工場で八月末まで水槽に漬けて塩分を抜くなどの作業が続けられ、のち慎重に錆止めの塗装処理が行なわれ、十二月末運びこまれることになっています。

エンジン引き揚げより間もなく三年、夢の島への全国的な運動と無数の人々の熱い思いをその巨大な体のすみずみにしみ込ませ、原水爆のない未来へ船と共に航海を続ける姿は、見つめる人々にそっとその鼓動を聞かせることでしょう。

炎天の展示館で戦争、広島・長崎を考える

八月、異常なほどの烈暑と時折の豪雨―国民の権利を次々に奪い去っていくかのような法案の成立に憤り、広島市の平和宣言に涙し深い共鳴と連帯を拡げ、戦後五十四年の八・一五に沸き出る思いをかみしめて、夏の展示館も多くの人々が訪れ船の願いをともにしました。なかでも埼玉・千葉・神奈川など近県の高校生がグループでつぎつぎに訪れ学習し話し合っている姿が印象的でした。館内でも久しぶりに「船と共に見つめてください広島・長崎のことを」と原爆関係の書籍を特別のコーナーを作って販売活動をし、西宮市の「原爆展」にパネルや資料を貸し出すなど協力しました。八月五日には、北海道留辺蘂町から三〇名近くの少年少女が「国内研修」に訪れ、はじめてみる船に歓声をあげていました。

また新日本スポーツ連盟など実行委員会が主催する「99反核平和マラソン」も展示館前からスタートし、九十人近いランナーが二日間箱根まで、核兵器廃絶のマラソン的訴えに参加しました。

反核平和マラソン出発

「マグロ塚」プレート設置

「小さな一枚の鉄板にすぎませんが、戦争や核兵器をなくしたいという思いを訴える力を持っています」―八月一日、東京・築地の魚市場に設置された「銘板」を前に大石又七さんは静かに語りました。

全国から二万余の署名と子供たちの十円募金を中心に三百万円を越える募金を得て、三年ごしの運動が実って、この日、プレートは、「マグロ塚をつくる会」の関係者数十人が見守る中、第五福竜丸の「原爆マグロ」が埋められたすぐ近くの魚市場の壁面にしっかりと取り付けられました。大きなマグロの絵が中心に描かれ、築地の魚市場に送られ、埋められて処分された経緯と、ふたたび起きないようにとの願いが簡明に記されています。魚市場正面入り口、広大な市場に向かって左側の壁面で、市場への大動脈「新大通り」に面し、積荷を満載したトラックが行き交い、記念碑設置には絶妙の場所。周辺がまだ未設備で目立つほどではありませんが、その無言の訴えは人々の心を打つ重みがあります。

当初予定されていた石碑はすでに完成していて、大石さんは将来この場所に置かれることを願いつつ、それまでは「マグロ塚」と刻んだ石碑は展示館前の広場に仮設し、プレートと共に訴えつづけてほしいと、いま東京都と折衝がすすめられています。

夢の島に ピースフラワー花だいこんを

大門　高子

八月六日朝のテレビで広島の慰霊祭の報道を見て、思い立って夢の島へ出かけました。以前第五福竜丸展示館の方に「むらさき花だいこん」の絵本と種をお渡しする約束をしていたからです。

展示館はキョウチクトウと蝉時雨に包まれ、黒い屋根の上に青い空が広がっていましたが、きのこ雲を思わせるまっ白な入道雲が、何か不気味でした。

この前来たのは、五月六日平和大行進のスタートの時。はしもとのぶよさんが「夢の島平和の船」を歌ってくれるのをききに来たときでした。はしもとさんから「第五福竜丸の歌をつくろうよ」とよびかけられ、いくつかの詩を書きました。改めて第五福竜丸保存への運動が日本の、いえ地球の平和を守ることに大事な意味のあることを再確認しました。

そしてあの日は、第五福竜丸のエンジンを海から引き揚げた杉さんにもお逢いしましたし、事務所で仙台からギターを抱えてラッキードラゴンへの思いを歌い続けてきた苫米地サトロさんの歌もききました。平和を願うたくさんの人の心をこの船がつないで来ているのだなあと思ったものでした。館の三尾さんとお話できたこともとても楽しかったです。合唱団白樺でロシア民謡を歌っていたことを話すと、三尾さんは中国の歌を歌う「燎原」という合唱団に参加していたことがあるというのです。そんなことから中国から来た花、むらさき花だいこんの話になりました。

春、土手や空き地でよく見られるスミレ色の菜の花を見たことがありませんか。この花は、日中戦争当時薬学者で軍人だった山口誠太郎さんという人が、中国から持ち帰り、その後、鎮魂と平和への思いに賛同する人たちによりまき広められました。強い花だったということもあり、今では全国いろいろなところで見られるようになっています。私はこの話に心ひかれ「むらさき花だいこん」と合唱朗読構成「紫金草物語」という組曲（作曲は大西進氏）を作りました。そしてこの夏、新日本出版社から絵本「むらさき花だいこん」という絵本を出させて頂きました。教科書で「一つの花」の挿絵を書いている松永禎郎さんが、素晴らしい絵で、とても素敵な絵本になりました。加害の問題を絵本にすることはとても難しいことです。現に今までほとんど出版されていません。

日本と中国の国交問題は、加害侵略を認めないという政府の姿勢もあり、友好関係はこれまでもぎくしゃくして来ました。核や平和を巡る思いもなかなか一つになりえない困難な面もありました。広島南京事件の展示に取り組もうとしたら、町の人達に反対されたとの話を聞いたこともあります。

秋になったら、第五福竜丸展示館の回りに種をそっとまいてみましょう！。そこで種をお届けしたのです。この春から少しづつ花だいこんの種を集めていたこともきいて、とても嬉しく思いました。

「八月六日の今日ここに来たことは、意味がありますね」と言われましたが、真の平和を願う多くの人達が集うここで、新しい平和運動の流れが生まれたらと思います。

人間として、国を越えて戦争を阻止する力、加害を許さず、核を持たない平和を守ろうというあたり前の声を、花で交わし合えたらと思うのです。そういう意味でもこの夢の島の第五福竜丸を、むらさき花だいこんで彩ることは意義のあることではないでしょうか。

花も平和も人の手で人の心で守り育てていくもの。

人間として生きていくのに忘れられないことがある。

忘れてならないことがある。＜絵本「むらさき花だいこん」より＞

一九九九年八月に

鈴木　昌

夏になると思い出す光景がある。ゴツゴツした火山岩だらけの山道を登って行く5歳の私。病院のベットの上に広げられたアルミニウムのお弁当箱の白いごはんと真中の赤い梅干。疎開先の家で夜の席に置かれた白い小皿の中の青いひたし豆。それは一九四六（S21年）七月の出来事だった。

私の父は一九四四年三月頃「日本は負けるから戦争には行かない方がよい」と祖父の言葉をあとに、民間人の興南組に入り、フィリピンセレベス島へ飛行場建設のために行った。同じ建築事務所の友人と二人は技術者だった。飛行機でシンガポール経由マカッサルに行くという電報が届いたきり、消息不明となっていた。

一九四六年七月初め、家族のいる長野県小県郡中塩田村五加（現上田市塩田町）の家へ連絡があった。父が引揚船で（重態のため一日も早く日本へということで病院船でなく）神戸港へ着き、看護婦さんに付き添われ松本連隊に運ばれているという。確認のため母は一人で松本に出かけた。自分で探すようにと言われ学校の体育館に寝かされた多くの人々の中から、ガイコツのようになった父を見つけるには二、三回寝ている人たちのあいだをみてまわらなければならなかった。やっとみつけた父は、後日、自宅に近い小諸陸軍病院分院へ移された。

病状は肺結核がすでに腸まですすみ、もっても一ヵ月とのこと。当時はまだストレプトマイシンなどの薬もなく、治療はビタミン剤の注射しかできなかった。母は毎日洗濯のため、小諸からの山道を登り通院した。クレゾール石けん液での消毒は夕方までかかった。七月中旬からは、付き添わなければならず、病気が移ってはいけないと、父と母は手と手をヒモで結び、ガラス戸越しの部屋で宿泊した。

七月三十一日の朝、ヒモがひっぱられた時には痙れんを起こし、間もなく父は亡くなった。前の日親戚からもらった小麦粉と砂糖を使って母がカステラを作った。それをほんの少し口にしたので、これで元気がでてくるだろうと母には思えたという。

「よくなったら中塩田村に住んで上田市の都市計画などやりたいなあ」「そうすればみんなそばに居られてよいわね」父と母の交わした最後の会話だった。

それから五十三年。今年四月、私の姪はある建築事務所に就職した。娘は浅間山をのぞむ場所に美術館をもつ学校で学んだ。彼女たちのお弁当はマックのハッピーセットだったりする。「ひたし豆って何？」と言う。八十三歳になる母は、戦争に行ったのに何の補償もなかった人々に補償の道があるらしいと、記事の載った新聞の切り抜きをして「また役所に行ってみるわ」と言っている。

私は、家族の歴史を話して、日の丸・君が代の歴史を夫とともに若い人々に語り合いたいと思う。

父の戒名は「報国院忠道正俊居士」。一九四六年七月三十一日没・三十三歳。

（目黒ユニオン・目黒区在住）

原爆忌東京俳句大会ひらく

八月八日、東京・北区の教育会館で第三〇回原爆忌東京俳句大会がひらかれました（同実行委員会主催、平和協会も後援）。

広島・長崎市はじめ各首長からメッセージが寄せられ、環境カウンセラの藤田敏夫さんが「原水爆禁止運動から環境市民運動へ」と題して記念講演を行ないました。

全国から一、五二三句の応募作品が寄せられ、都知事賞、現代俳句協会賞などの入賞作品が顕彰されました。今回からは小中学生の部の応募も行なわれ四一七句の作品から「原爆の話し聞き終えのどのかわく」（小5・中根千尋さん）「なんとなく八月六日は空を見る」（中2・栗原絵美さん）などの作品も顕彰されました。第五福竜丸平和協会賞には小林道夫さんの次の句が選ばれ、記念品と「第五福竜丸の鼓動にそっと耳を傾け原水爆のない二十一世紀を」との賞状がおくられました。

炎天の心音たしかむ被爆の地